

氏名 野本瑠美

本論文は、『久安百首』を中心とした応制百首、「寿永百首」「天神仮託百首」といった奉納百首など、中世に特徴的である百首和歌の性格を分析したものである。序章・終章のほか、本論は二編各二章に分かたれ、計九節から成っている。

第一編は応制百首に関する論から成り、『久安百首』を主として取り上げている。第一章第一節は『久安百首』の羈旅歌を総合的かつ細やかに分析し、従来副次的なものにすぎなかった羈旅の主題の可能性が本百首で拡大され、和歌史の上で羈旅題の画期となったことを解明する。第二節は同百首の「短歌」(実は長歌)に、不遇感以外にも慶賀・謙辞・恩恵への期待・願望の表明などの表現が見られることを指摘し、これが『古今集』の長歌や詩序の影響であり、述懐を受けとめようとする崇徳院の意志に応えようとしたものであることを明らかにする。第二章は藤原教長の羈旅の歌が、『久安百首』の優美な姿から、保元の乱後の配流の体験を経て、大きく変貌したさまを浮かび上がらせている。第二節は『久安百首』作者の藤原隆季をめぐり、その百首の詠歌の特徴や『建春門院北面歌合』での役割についての新見を提示する。

第二編第一章は奉納百首をめぐり、「寿永百首」を中心として論じている。第一章第一節で奉納百首の中世的展開について概説したのち、第二、三節は「寿永百首」に属する家集を、奉納百首の視点を重視して具体的に読み込む。第二節は『経盛集』につき、これを家集ではなく奉納百首として読むことで、神への願いを奏上する意図を新たに抽出する。第二節は「寿永百首」の『長明集』をめぐり、奉納百首の視点から分析することで、末尾の贈答歌に賀茂神への祈願を読み込む新解釈を提示する。第二章は、中世において膨大に生み出された、菅原道真に仮託された歌集のうち、これまで未検討であった、百首歌の形態をもつ山岸文庫蔵本など異本系統本に関して論じる。その系統の有する由来譚が貞治二年六月の安楽寺神託詩歌の義詮への献上の事実に基づく虚構であることを解明し、合わせて南北朝時代貞治年間前後の和歌を利用していること、および北野社関係者の手になるという成立事情を推定する。第二節は、伝本の文献学的研究に裏づけられつつ、同百首のうち、山岸文庫蔵本の古態性を論証している。第二節では同本を翻刻紹介する。

本論文は、中世の百首和歌につき、手堅い実証的方法によって、数多くの事実を解明している。もとより中世の百首和歌のうち本論文で扱ったものはその一部であり、今後の課題も存するが、本審査委員会は本論文に上記のような研究史的意義を認め、博士(文学)の学位に十分値するとの結論に至った。